

# エロゴルフ (1)

エージェント

春日信彦

## 美女の誘惑

昨年（平成28年）の12月で63歳になった松山は、今年の4月に長男の千秋（ちあき）に社長の座を譲った。社長の座を退いてからは、経営に関し一切口出しをしないことにした。経営の補佐は、今まで通り専務の植木に任せた。そして、5年前にくも膜下出血で妻を亡くした松山は、これからの人生の目標を立てるために、ここ3ヶ月前から雷山（らいざん）の別荘で愛猫の“ピエロ”と一緒に研修生のような合宿生活を送っていた。9月1日（金）今朝も、マネージャー役のピエロにオキニャ〜チャイ、オキニャ〜チャイ、と耳元で声をかけられ、ペロペロとほほを舐められると「俺はまだ若い」と強がりと言って飛び起きた。

ピエロにキャットフードと水を与えると脚腰が衰えないように別荘の路地を適当に駆け巡るランニングに出かけた。20分ほどのランニングから戻り、コーヒー、食パン、ハムエッグ、納豆、豆乳、野菜スープ、ヨーグルト、リンゴの朝食を済ませると、書斎のノートPCで主なニュースをざっと確認した。迎撃ミサイル配備、原発再稼働、オスプレイ墜落、衆議院解散などの報道が目飛び込むや否や、「あ〜〜あ、日本もおしまいだ」とぼやき、窓際のソファに腰かけ、眼下のゴルフ場を眺めた。いつものようにピエロが膝の上に飛び乗り、ニャ〜〜に浮かない顔をしているのと声をかけてきた。ピエロの頭をなでながら、二段グリーン上の風に揺らぐピンフラッグをぼんやりと眺めていると脳裏のスクリーンに植木とともにがむしゃらに働き続けたサクセスストーリーが映しだされた。

フォークシンガーソングライターにあこがれた松山は、中学のころからギターを習い始め、中学3年生のころになると、中洲や天神で路上ライブを始めた。世界的メジャーを目指した彼は、デビューするために東京で音楽活動をやりたいと父親に願い出たが、「田舎者のイモ兄ちゃんが、歌手になんかなれるものか」と猛反対された。猪突猛進（ちよとつもうしん）の彼は、親に内緒で高校を中退し、家出同然で上京した。そして、生活費を稼ぐためと度胸をつけるためにキャバレーを転々とし、コンテストにも何度か出場した。だが、どこの事務所からも声がかからなかった。

プロ歌手としてのデビューを果たせなかった彼は、夢をあきらめ25歳で郷里の糸島（いとしま）に帰ってきた。父親に勘当を解かれた彼は、タクシー乗務員を1年やり、2年目には父親が経営する伊都（いと）タクシーの総務課長になった。その当時は、総台数5台の小さな有限会社で、社員間のもめごとが絶えず、また社員の入れ替わりも激しかった。さらに、銀行からの借入れもままならず、倒産寸前に陥っていた。伊都タクシーの再建を人生の目標に設定した彼は、経営のことはまったくの素人だったが、社員のために尽くそうと、病院、ホテル、料亭、飲食店、などへの広報活動に励んだ。また、毎朝一番に出勤した松山は、入り口前に立ち、出勤してくる社員たちに「おはようございます」と大声で挨拶し、笑顔でぺこぺこ頭を下げた。

松山のひた向きの姿勢に影響されたのか社員たちに笑顔が見えるようになり、朝礼ではポジティブな発言も出るようになった。会社もどうにか軌道に乗りかけてきた32歳の時、大阪のM商社を退職した陽気な26歳の植木が入社してきた。植木は、父親の大学の後輩にあたり、F大学商学部卒で、税務に強く、営業にも長けていた。経理係長職に就いた植木は、人脈を通じての取引銀行への挨拶と徹底した経費削減に努めた。その結果、銀行からの評価もよくなっていった。また、給与の見直しも積極的に提言し、その効果もあって、着実に乗務員数も増え続けた。タクシー保有台数20台になると有限会社から株式会社に昇格させた。

42歳の時、父親が心筋梗塞で亡くなり、総務部長兼副社長の松山が新社長に就任した。同時に経理課長から総務部長に昇格した植木は、より一層松山の手足となり、社員管理力と外交力でますます会社を拡大していった。松山は高校中退で、経営学や税務に疎く銀行からの信用があまり得られなかったが、人脈に強い植木が銀行との交渉をするようになってからは、融資がスムーズに行われるようになった。10年前には、保有台数50台の中堅タクシー会社となり、純利益も安定するまでになった。ここまで会社を大きくしたのは、植木であるから、社長になるだけの資格はあったが、植木は何一つ不平を言わず、長男千秋の社長就任を祝福した。

ピンポ〜ン、ピンポ〜ン、チャイムの音に我に返り、今ごろ誰だ？と思った時、ピエロがぴよんと膝から飛び降り、玄関にかけて行った。ドアを開けた来客は、「植木です」と大声を発するとニヤ〜と出迎えたピエロを抱っこしてリビングに顔をのぞかせた。植木はいつもならば、午後にやってくるのだったが、なぜか今日に限って午前中に子供のようにスキップしながら笑顔でやってきた。松山は振り向き、植木に声をかけた。「どうした？宝くじにでもあたったのか？」笑顔の植木は、右手を顔の前でひらひらと振り、より一層笑顔を膨らませた。「会長、耳よりの話を持ってまいりました」明るい声を響かせた植木は、リビング中央のソファで松山がやってくるのを待った。

中央のソファにやってきた松山は、神妙な顔つきで植木に腰かけるように促し、彼の顔を覗き込んだ。「もしかして、中洲に人気AV嬢がやってきたのか？」上着を脱いだ植木は、急にドヤ顔になって話し始めた。「会長、今日はマジな話です。まあ、こっちの話もありますけど」右手の小指を立てた植木は、もったいぶった話し方をした。気をそそる話し方に松山は、興奮してきた。「おい、早く話せ。さあ」植木は、おでこを右手の指先で二度かき、ちょっと間をおいて話し始めた。



「話と言うのは、マージャンクラブで懇意にさせてもらっている社長さんから聞いた話なんです。タイのゴルフ倶楽部会員のことなのです。そこのゴルフ倶楽部会員になれば、信じられないような特典があるそうなのです。すでに日本の多くの政財界人たちが会員になっているようで、今後、政治家との交流を深めるにはもってこいのゴルフ倶楽部会員なのです。いかがですか？」松山は、突然のゴルフ倶楽部会員の話で、まったく内容がつかめなかった。「おい、もう少し、具体的な話をせんか。さっぱりわからん。そこの会員権はいくらするんだ。べらぼうに高いんじゃないか？」

一度うなずいた植木は、眉間に皺をよせ思い出すような顔つきで話し始めた。「本社は、ロシアのボグログラードにあるそうですが、ロシア政府管轄下のロシア皇帝KGBバンクが大株主のロシア皇帝KGBカンパニーという会社があるそうです。そこが全株出資しているという皇帝KGBゴルフ倶楽部が、数か国に現地法人としてあるそうです。タイ以外にもベトナム、マレーシア、フィリピンにも皇帝KGBゴルフ倶楽部があるそうです。セールスレディーに電話で聞いたところ、会員権は100万円と言うことでした。かなりお得じゃないですか」

松山は、計算高い植木にしては、バカな話を持ってきたと叱るような口調で返事をした。「おい、確かに、100万は、やすいかもしれんが、タイのへき地じゃないか。そんなところにあるゴルフ倶楽部がお得と言えるのか？宿泊費と交通費を考えてみろ、どこがお得なんだ」一瞬ひるんだ植木だったが、真剣な眼差しで返事した。「会長、話はまだ終わっていません。本当にお得な話が、まだあるのです」

松山は、ゴルフの会員権の相場は低下する一方で、これから投資する商品ではないと思っていた。ちょっとムキになり大人げない発言をしたと反省した松山は、自分の考えを述べた。「もう、会員権はやめた方がいい。きっと損をする。タイと言えども、同じに決まっている。ロシア皇帝KGBとやらは、初めて聞く会社だな～。ちょっとヤバイんじゃないか？眉唾物の商品に手を出すと、痛い目に合う。植木も、焼きが回ってきたな」植木は、会長を睨み付けると胸を張って答えた。「会長、焼きが回ったとは、私も、見くびられたものですね。とにかく、話を聞いてみてください」



ドヤ顔の植木に圧倒された松山は、とにかく話だけでも聞くことにした。「まあ、そこまで言うのなら聞こうじゃないか。儲け話は好きな方だし」植木は、腕時計に目をやると即座に返事した。「11時の約束です。セールスレディーの大原さんが、もうそろそろ来る頃です。彼女から、詳しい話をお聞きになってください」松山は、タイからセールスレディーがやってくると勘違いした。「おい、タイからセールスに来るのか？」

笑顔を作った植木は、即座に返事した。「そんな馬鹿な、ロシア皇帝KGBカンパニー傘下の系列会社に皇帝KGBジャパンツーリストと言う旅行会社があるそうで、その支店の一つ博多駅南支店からやってくるそうです。九州の政財界人がかなり会員になっているみたいで、彼女はA衆議院議員やY都市銀行の役員たちが会員だと言っていました。電話の声では、かなり色っぽい声でしたよ。楽しみですね」松山は、女性のセールスレディーがやってくると思うと、少しワクワクしてきた。

植木がもう一度腕時計をチラッと覗いた。その時、訪問客を知らせるチャイムが鳴った。ピンポ〜ン、ピンポ〜ン、松山の膝からぴよんと飛び降りたピエロは玄関にかけて行った。植木が玄関に向かおうと立ち上がった時、女性の色っぽい声がりびングまで響いてきた。「皇帝KGBジャパンツーリストの大原と申します。御在宅でしょうか？」即座に、声に反応した植木は、出迎えに玄関にかけて行った。ソファの横に突っ立った松山がハゲ頭に右手を置いて恥ずかしそうな表情をしていると植木が濃厚な色気をプンプンさせたロシア人女優のような超ミニスカのセールスレディーを案内してきた。

「ここ、こちらが、伊都タクシーの松山会長です」植木は、あまりの色気に興奮し、声が上ずっていた。彼女は名刺を差し出し、自己紹介した。「わたくし、皇帝KGBジャパンツーリストの営業を担当しています大原と申します。よろしく申し上げます」松山も超ミニスカから伸びた妖艶な長い脚に目が行くと心臓がバクバクとなり始めた。腰かけると長い脚を斜めに倒し、股間を隠すかのように赤いファイルを太ももの上に置いた。松山はにやけた顔で挨拶した。「ようこそ、いらっしやいました。今、植木からタイにある皇帝KGBゴルフ倶楽部の話を聞いていたところでした。とても素晴らしいゴルフ倶楽部と言うことで、さらに、詳しい話を聞きたいと思っていたところでした。おい、お茶」

植木は、キッチンに飛んでいき、フレッジから十六茶のペットボトルを取り出し、震える手でお茶をグラスに注ぐと、両手の震えを抑えながら3つのグラスを載せたトレイを運んできた。そして、固まった顔つきで彼女の前にそっと差し出した。「どうぞ」植木が顔を覗くと輝くブルーの瞳で笑顔を返してきた。透き通る肌の巨乳の谷間に釘付けになっていた松山は、何と言って声かけしていいか戸惑ってしまった。「実に、お美しいですね。あなたのような美人は初めてです。こんなド田舎には、ブスしかいないもので。失礼な質問ですが、あなたは、ハーフでいらっしゃるんですか？」

彼女は、ニコッと笑顔を作り返事した。「はい、父がロシア人で、母は日本人です。モスクワ大学を卒業後、弊社に入社いたしました。昨日、植木様からお電話をいただき、皇帝KGBゴルフ倶楽部会員についてご説明させていただけるということで、早速参りました。皇帝KGBゴルフ倶楽部には、数か国に現地法人がございますが、今回は、タイ法人についてご説明させていただきます。概略は、お聞きになられたそうですが、ゴルフ倶楽部会員の特典について、まず、ご説明いたします」股間を隠すように太ももの上に置いていた赤のファイルから大原は資料を取り出した。

「プレイフィーは、ワンラウンド、日本円で約3万円、ツーラウンドプレイの三泊四日のツアーですと宿泊費、プレイフィー、諸雑費で合計約14万円です。皇帝KGBゴルフ倶楽部自慢のサービスとして、会員様がプレーなされる場合、キャディーのほかにお気に入りのコンパニオンを一人お付けいたします。また、ホテルに宿泊なされた場合、オプションにはなりますが、夜のコンパニオンを派遣することができます。プレーしながらコンパニオンとデートできるという企画は、多くの会員様に喜んでいただいております。今までの説明でご質問はございますか？」

二人は、コンパニオンと聞いて目を丸くした。日本には当然あり得ない話で、コンパニオンと一緒にプレーできるとあれば、スケベな金持ち政財界人たちの購入は納得できた。松山は、あまりにも贅沢なサービスに度肝を抜かれたが、スケベ心がムクムクと沸き起こり質問することにした。「はあ、そのコンパニオンサービスですが、プレー中にデートすると言っても、彼女たちはタイ人でしょ。日本語は話せるのですか？」

ピクピクっと引きが来たと感じ取った彼女は、笑顔で答えた。「コンパニオンは、タイ人、ベトナム人、フィリピン人、インドネシア人、ネパール人、インド人たちで、おっしゃるように日本語は、あいさつ程度しか話せません。でも、話せない分、スキンシップでサービスをさせていただいております。よほどコンパニオンのサービスが気に入られたのか、三名のコンパニオンを帯同なされる会員様もいらっしゃいます」

スキンシップと聞き、口をとがらせて二人は見つめ合った。おさわりの妄想を膨らませた松山はスキンシップについてもっと具体的に聞きたかったが、スケベジジイと思われるようで、出かかった言葉をグイッと飲み込んだ。平静な顔を装った松山は、話を進ませた。「なるほど、素晴らしいサービスですね。コンパニオンがつくとなれば、プレイフィー3万円は、お得ということですか。まだ、特典があるのですか？」

食いに入ったと確信した彼女は、股間の奥が見えるように脚をゆっくり組み、真っ赤なショーツをサービスした。「はい、皇帝KGBホテル内のスポーツ施設の使用料、レストランでの飲食代は一般料金の半額となります。また、最も人気のあるカジノでお遊びなされる場合、500万円までのご融資を無利息で行っています。そのほかにもいくつかの会員様向け割引がありますが、それらについてはこちらのパンフレットをご参考になさってください」

彼女は、膝の上に置いていたファイルからパンフレットを取り出し松山に手渡した。真っ赤なショーツが脳裏に焼き付いた松山は、視線を股間に向けたままパンフレットをうわの空で手に取った。「少し早口で説明いたしました。ご質問はございませんか？」生まれて初めて見たロシア美女の透き通る肌の内腿の残像が目には焼き付き、松山の頭は、完全に思考力を失っていた。いつの間にか二人の股間は盛り上がっていた。植木は顔を真っ赤にして股間を両手で抑えていた。この二人は、かなりスケベジジイと確信した彼女は、詰めに入ることにした。

「納得いただければ、こちらの仮契約書にサインいただけますか？」契約書と聞いた松山は、我に返った。「え、今すぐ、契約するのですか？」彼女は、笑顔で返事した。「あくまでも、仮の契約です。大切なご契約ですから本契約まで、再度お考えいただける時間を設けている次第です。一か月以内に本契約をなされなければ、この仮契約は無効となります。何か、疑問点がございましたら、何なりとご質問ください」松山は、すぐにでも契約したい気持ちになっていたが、この機会だからコンパニオンについてもっと聞いてみることにした。

「コンパニオン付きのプレイフィーは、お得だということはわかりましたが、スキンシップと言うのは、腕を組んで歩くということでしょうか？」パクっとエサに食いついたと確信した彼女は、食い逃げされないように悩殺の言葉を浴びせかけた。「それはもちろんです。さらに、奇数ホールには茶店をご用意しております。そこには二人だけになれる個室をご用意しております。そこでコンパニオンの濃厚なサービスを楽しんでください。そう、日本のヘルス嬢のサービスと考えられても結構です。ほかに何か？」

ヘルス嬢と聞いた松山は、エッチな妄想が爆発し、夜のコンパニオンのことも聞きたくなってしまった。「夜のコンパニオンを派遣できると言われましたが、それは？」スケベ度マックスと判断した彼女は、もう一度脚を組み替え真っ赤なショーツのサービスをした。「夜のデートは、オプションとなりますが、コンパニオンは会員様のお気持ちに十分沿うように研修いたしておりますので、カクテルを飲ませて、ちょっと、口説いていただければ、十分満足いただける夜のサービスを提供させていただきます。他には？」二人は、コンパニオンの巨乳に顔をうずめている姿が頭に浮かび興奮を抑えられなくなっていた。もはや、松山は催眠術にかけられたかのように誘導されていた。「はい、よくわかりました。あくまでも、仮ですよ。どこにサインすればいいのですか？」

松山は、差し出された仮契約書の署名欄に震える手でミミズが這ったような字を書いた。植木も身を乗り出して催促した。「私もサインします」一瞬植木の顔を覗き見たが、自分で金を払うつもりだと思い、黙ってみていた。二人の署名が終わると笑顔でお礼の挨拶をした。「このたびはありがとうございました。次回は、タイ法人皇帝KGBゴルフ倶楽部の約款をお持ちしますので、その時に本契約をお願いします。また、会員権購入代金100万円もその時に受領させていただきたいと思っておりますので、ご用意よろしく願いいたします。最後に、なにかご質問はございませんか？」



購入意思を固めた松山は、ゴルフ倶楽部会員権の相場と代金支払い方法について尋ねた。「日本では会員権の相場は低下していますが、タイでは、会員権の値上がりは期待できますか？それと、代金は、小切手でもよろしいですか？」彼女は、なまめかしい表情を作り返事した。「はい、会員権は年5パーセントの利回りとなっています。100万円に対し、年に5万円の利益が出ます。さらに、近年、世界各国の資産家による買いが殺到し、タイでは、ゴルフ倶楽部会員権の相場は急上昇しております。お支払い方法ですが、現金、小切手、クレジットいずれでも受け付けております。そのほかには？」

植木は、すぐにでもタイに飛んで行き、コンパニオンのスキンシップサービスを受けたい気持ちになってしまった。「航空運賃に割引はございますか？」彼女は、思い出したように返事した。「はい、弊社の系列航空会社、タイランドKGB航空をご利用なされた場合、半額になります。また、空港へは、皇帝KGBホテルのデラックスリムジン車がお迎えに参ります。タイへご旅行される際には、皇帝KGBジャパンツアーリストが、すべてを手配いたしますのでご安心ください。松山様並びに植木様とご一緒にラウンドできる日を楽しみにしております。それでは失礼いたします」

彼女は、深々とお辞儀すると玄関に向かった。ぼんやりしていた植木は、あわてて後を追ひ、玄関先に飛び出し両手で股間を抑えて見送った。腑抜け面の植木がリビングに戻ってくると松山は、股間を左手で抑えて彼女の話始めた。「おい、あんな美人、初めてだ。日本中のソープを渡り歩いても、あんな泡姫には巡り合わないだろうな」植木も目を丸くして話し始めた。「まったく、あの色気にはまいりました。股間まで見せられたら、スケベジジイはいちころですよ。私も、御一緒させていただき、ありがとうございました」

怪訝な顔つきになった松山は、確認した。「おい、まさか、俺に、100万円払わせる気じゃないだろうな」植木は、驚きの表情を作り返事した。「え、いつも、私の分は会長が」松山は、してやられたと思った。「ソープとこれとは別じゃないか。100万だぞ」植木は、平然と返事した。「会長一人でタイに行かれるのですか？私がお供した方がよろしいかと」松山は、植木のこれまでの功績を考えるとダメだと言えなかった。「まあ、一人では、楽しくないよな。200万か、まあ、資産運用と考えると、シャ～～ない」

植木は、突然現金になって、笑顔で話し始めた。「本契約は、いつにいたしましょうか？早い方が。コンパニオンとデートしながらのラウンドか！来月にも、タイに行きたいですね、会長」松山の頭はエロエロになってしまい、タイの社会情勢のことなどまったく考えていなかったが、テロのことがちょっと心配になった。「おい、浮かれるのもいいが、タイの治安に問題はないのか？テロに出くわすってことはないだろうな」植木にとって治安のことなどどうでもよかった。「心配ありませんよ。タイは治安がいいそうです。二泊三日で、来月当たりどうです？」

9月15日（金）午前11時、松山と植木は、本契約のために雷山の別荘で大原の訪問を待っていた。ピンポ〜〜ン、ピンポ〜〜ン、チャイムの音を聞いた二人は、偶然にも同時に跳びあがった。「おい」松山が声をかけると、植木は即座に玄関にかけて行った。松山は借りてきた猫のようにソファの横で両手を前にそろえて巨乳の大原を待った。植木のパタパタと響くスリッパの足音に気を取られていると、大原は彼女よりも若く、ゴールドのショートヘアで引き締まった脚の女性を従えてリビングに現れた。松山は、ホテルのドアマンのように、即座に笑顔を作り挨拶した。「お待ちしておりました。さあどうぞ」

中央のソファに腰かけた大原は、左隣に腰かけたショートヘアの女性を紹介した。「こちらは、今年の4月に入社しました宮里です。今後、お二人のお世話をする事になると思ひまして、同行させました。早速、お電話いただきまして、誠にありがとうございます。ご契約にあたりまして、まず、タイ法人皇帝ゴルフ倶楽部の約款のご説明をさせていただきます。こちらが弊社の約款になっておりますが、特に重要な点について分かりやすく記載されています“ご契約のしおり”がこちらにございますので、こちらのしおりでご説明させていただきたいと思ひます」

松山は、コンパニオンのことが分かれば、法律的なことはどうでもよかった。「しおりは後で読ませていただきます。早速、契約書にサインいたしましょう」大原は、左隣の宮里から4通の書類を受け取り、巨乳の谷間がよく見えるように前かがみになり、松山と植木の正面にそれぞれ二通ずつ差し出した。「こちらにご住所とご署名をお願いします。それと、御印鑑をこちらとこちらの2か所をお願いします」エロ攻撃を食らった二人は書面の内容に目を通さず、そそくさと署名と押印を終えた。大原はエロジジイゲットと心の中でつぶやき、それぞれ一通ずつ二人から契約書を引き取った。「そちらは、松山様と植木様の契約書となっております」二人は、手元にある契約書にチラッと目をやると、即座に大原の巨乳の谷間に目を移した。



大原は宮里に2通の契約書を手渡すと即座に話し始めた。「代金をご用意いただけましたでしょうか？」松山は、植木の分を合わせて、200万円の小切手を切る準備をしていた。「はい、小切手をお願いします」松山は、200万円と記載された小切手を彼女の前に差し出した。丁寧な字で領収証を切った彼女は松山にそれを手渡した。彼女は満足げな笑顔を見せると話し始めた。「ゴルフ倶楽部会員の特典については、先日前お話ししましたが、なにか、気になる点はございませんか？ 今後は、宮里と私が松山様と植木様の窓口になりますので、ご遠慮なくご要望を御申しつけくださいませ」

ソワソワしていた植木がツアーについて質問した。「早速ですが、来月当たり、どうなんでしょうか？ 人気があるみたいですから、半年待ちぐらいでしょうか？」彼女は、じらすように少し間をおいて返事した。「いえ、いかなる場合でも会員様のご要望にお応えできるだけのゴルフ場を保有しております。万が一、タイのゴルフ場がいっぱいでも、ベトナム、フィリピンにも多数ゴルフ場を保有していますので、ご希望の日程でのご案内が可能です。今月ですと、29日（金）から三泊四日のタイツアーがございます。いかがでしょうか？」

植木は身を乗り出し、松山の顔色をうかがった。松山も行きたい気分であったが、月末の予定を確認しなければ返事できないと思えた。「それは、急なことですね。二人ともパスポートはあるので、行くことは可能ですが、スケジュールを確認しないことには何とも返事しかねます」彼女は、笑顔で返事した。「松山様のご希望される日程で、どのようなツアーも可能ですから、御都合がつく日程がお決まり次第ご連絡ください」

植木は、今回のツアーにどのような会員がいくのか興味があった。「ちょっとお聞きしてもよろしいですか？ そのツアーには、どのような方が参加なされていますか？ 差し支えなければお教え願いたいのですが」彼女は隣の宮里に視線を向けると一つ頷いた。阿吽（あうん）のタイミングで宮里はホワイトのバッグからファイルを取り出し、大原に手渡した。資料を見つめた大原は、一呼吸おいて返事した。「確かに、参加者のことが気になられる会員様もいらっしゃいます。個人情報に当たりますので詳しくは申し上げられませんが、A財務大臣、N 経済産業大臣、その秘書2名、プロ野球のG監督とS監督、です。今回のツアーは、8名とさせていただいておりますので、あと2名のみ参加が可能ということになります。くれぐれも、このことは、ご内密にお願いいたします」



植木は眉間に皺をよせ、何か考えているようであった。「2名のみですね。今のところは、まだ決まっていないということですね」大原は、軽くうなずいた。「日本オープンに出場されたことのある松山様の参加であれば、先生方も監督も歓迎されることだと思います」植木が、ドヤ顔を作り質問した。「少し考えさせてください。返事は火曜日には致します。ところで、宮里さんもセールスレディーでいらっしゃるのですか？」大原はほんの少し微笑み隣のショートヘアの宮里の役職を説明した。「彼女は、通訳とガイドを担当しています。A 大臣の御指名で、今回のツアーにも参加いたします。ゴルフはシングル級ですよ。ね、宮里さん」

松山は、シングルと聞いて身を乗り出した。「へ～～、シングルですか。ハンデはおいくつですか？」宮里はシングルと紹介されて顔を赤らめてしまった。「シングルと言っても、大学でゴルフ部だったという程度でたいしたことはないんです。大原さんが、大げさに言っているだけです」松山は、ゴルフ部であれば、かなりの腕だとにらんだ。「それでは、今回のツアーで、大臣たちと御一緒にプレーなされるんですね」

宮里は、パツと笑顔を作り返事した。「はい、プレーいたします。どういうわけか、先生に気に入られて。先生は、野球選手とゴルファーにとっても好意を持たれておられます。もし、トップアマの松山様をご参加なされるのならば、先生は、とても歓迎されると思います」植木が、身を乗り出し松山の自慢話を始めた。「会長は、糸島中学ゴルフ部特別顧問をなされていて、ジュニアの育成にも力を入れておられます。糸島では、ちょっとした有名人なんです」

マジな顔つきになった松山は、宮里をじっと見つめた。「今回のツアーに参加できるかどうか分かりませんが、いつか機会がありましたら、ご一緒にプレーいたしましょう」宮里は、満面の笑みを浮かべ返事した。「ぜひ、お願いいたします。トップアマの方とラウンドできるなんて、夢みたいです。よろしくお願いいたします」大原は、笑顔を宮里に向けると声をかけた。「よかったわね。今日うかがったかいがあったわね。それでは、松山様と植木様のご返事を心待ちにしております。この辺で失礼いたします」彼女が立ち上がると宮里も即座に立ち上がった。

## 不吉な予感

彼女たちが去ったりビングには、体臭と香水がブレンドされた甘い香りが漂っていた。すでに行くつもりになっていた植木は、能天気な笑顔で松山に確認した。「会長、行かれますよね。またとない、絶好の機会です。早速、準備いたしましょう」行く気にはなっていたが、松山は、笑顔を作らなかつた。なぜか、漠然とした不安がよぎっていた。「まあな、行ってもいいが、どうもな～～。何か、引っかかるんだ。何かが？」

植木は、松山の言っている意味がさっぱり分からなかつた。「いったい、何が、引っかかるとうんです。日本には、絶対ない、最高のサービスじゃないですか。しかも、大臣とラウンドできるかもしれないんです。こんな機会は、二度とないかもしれませんよ」松山は、腕組みをして天井を見つめた。「ウ～～」とうなり声をあげると考えていることを話し始めた。「どうも解せないんだ。大臣が、プロ野球の監督たちと旅行するのは、分からなくもないが、どこの馬の骨ともわからない俺たちのような庶民と旅行に行くだろうか？おまけに、俺のエサみたいなシングル級の若くてかわいいガイドのお目見えときてる。ちょっと、できすぎてりやしないか？何か、引っかかる」

植木は、即座に懸念を打ち消すかのように反論した。「何をおっしゃります。会長は、トップアマとして有名じゃないですか。そこを見込んで誘ってくれたに違いありません。他では体験できないラウンドを提供するのが、皇帝KGBゴルフ倶楽部のいいところじゃないですか。ちょっと、考え過ぎじゃないですか？素直に、幸運を受け入れましょうよ。かわいいピチピチコンパニオンが待ってるんですよ。迷うことなど、ありませんよ」そのようにご機嫌を取られた松山だったが、心に漂う不吉な予感は消えなかつた。

植木は、松山の気持ちの方向を変えようとゴルフの話を持ちかけた。「最近、うまくなったでしょ。会長のアドバイスのおかげです。ついに、90が切れるようになりました。ウッドを短く持って、着実に前進して、ボギーを確実に取れ、とアドバイスいただき、最近、まぐれでパーも取れるようになりました。夢みたいです。ショートウッドがあれば、ダフリのアイアンな

んて、いりませんね。みんなもショートウッドを使えばいいのに。やっぱ、見栄を張ってるんですかね」

松山は、ふと我に返り、自分を見失っていたことに気がついた。つい最近まで、豪快に背筋力で飛距離を出して、バーディーを取る事ばかり考えていた。だが、自分の左脚に対する感謝を忘れてしまっていたように思えた。高齢になれば筋力の衰えや疲労回復の遅れは、当然起きる。それなのに、そのことを考えず、若いころと同じように目いっぱい背筋を使っていた。ショットの不調の原因は、おそらく、そこにあるように思えた。

左脚の動きを考えず、がむしゃらなスイングが、ミスショットを生んでいるように思えた。今一度、初心に戻り、左脚の働きを重視し、もっと左脚の声を聞かなければ、と反省した。若いころは、左脚の声が聞こえていたのに、年を取るにしたがって傲慢になってしまったのか左脚の声が聞こえなくなっていた。この機会に、心機一転、左脚を鍛え、左腰の切り上げを強化することを決意した。

ドヤ顔の植木に目をやると感心した表情で返事した。「ほう、植木も、ついに90を切れるようになったか。まあ、ウッドは滑ってくれるから、コンパクトに打てば、ダブルこともない。ティーショットもドライバーにこだわらず、クリークを多用すればいい。今の調子でやれば、スコアも安定するだろう。タイでのゴルフが楽しみだな」植木は、大臣とのタイツアーが決定したと思い、歓喜の返事をした。「早く、タイのコースでラウンドしたいですよ。触り放題のピチピチコンパニオンも待っていることだし」

今回のタイツアーは、長い間、伊都タクシーに貢献してきた植木への感謝を兼ねていた。千秋が社長に就任できたのも、植木が陰ながら必死に働いてくれたからであった。そのことは、全社員が認めるところであった。「大臣や監督たちと一緒にというのは、ちょっと気が重いけど、植木の慰労を兼ねて、思い切っていくとしよう。二人が、ちょっと羽を伸ばしても、社員は大目に見てくれるだろう。そうと決まれば、旅行の準備だ」

植木は、気持ちを汲んでくれた松山に自分の思いを打ち明けることにした。「会長、ありがとうございます。今まで会長にお仕えしてきたかいはありました。会長に似て、千秋社長もたいしたものじゃないですか。会長と私は、死ぬまで同士です。死ぬまで愛し続けます。これからもよろしくお願いします」松山は、男の愛をうち明けられるとちょっと気持ち悪くなった。「おい、愛は、女だけにしてくれ。男同士の愛っていうのは、キモイぞ」

本音を打ち明けて顔を赤らめた植木は、福岡に攻勢をかけている外資系タクシー会社の話を始めた。「ところで、福岡市に一昨年攻勢をかけてきたモサドタクシーは、かなりの脅威ですね。糸島市に侵攻してこなければいいのですが。モサドタクシーには、AIが搭載されていて、かなりの人気を得ているそうです。福岡県タクシー協会の知り合いからの情報ですが、すでに、数社のタクシー会社が倒産寸前だそうです。うかうかしていると、伊都タクシーも、つぶされるかもしれません」

松山も外資系会社には、脅威を感じていた。特に、一昨年から、外資系多国籍企業が急増していた。CIA電力、SIS水道、DIA兵器、FBI 警備などの多国籍企業が日本の基幹産業に参入するようになり、日本企業は経営難に陥っていた。「まったく、困ったものだ。政府が、もっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかった。日本の歴史も、文化も、すべて破壊されてしまう。もう、おしまいだ。だが、伊都タクシーは、死んでも守ってやる」

植木は、いずれ、日本人エリート政府も崩壊すると予測していた。外国人エリート育成のための外資系私立大学が建設され、旧帝国大学でさえも、私学化されつつあった。防衛費の占める割合は、急激に大きくなり、福祉の予算は、ますます縮小されている。また、ロッキード資本の国内軍事産業は、日本政府の支援も受け、着実に基幹産業に発展している。さらに、低賃金長時間労働やサービス残業などの不法な労働が黙認され、また、低賃金労働を許容する移民の増大により、多くの日本の若者たちは、職を失っている。窮地に陥った若者たちは、反戦を叫びながらも、やむなく軍人を志望するようになっていく。

国会議事堂に届くほどの植木の雄叫びが響いた。「やりましょ～～、会長。今こそ、大和魂の時です。このままでは、日本は、沈没します。政界に打って出るのはです。本来の自民党に変革するのはです。会長のためなら、死んでも本望です」松山は、あまりの大声に度肝を抜かれてしまったが、平静さを取り戻すと、突如耳に飛び込んできた政界と言う言葉に首をひねった。「おい、俺は、政治家になるとは、一言も言った覚えはないぞ。田舎ジジイが国会議員になれるものか。とにかく、伊都タクシーを守ることだ」

植木は、どうにかして松山を政治家にしたかった。そのために、知り合いのジャーナリスト、作家、企業役員などに協力を要請していた。「会長、弱気じゃいけません。沈没し始めた日本は、松山会長と言う救世主を必要としているのです。日本のため、伊都タクシーのため、一念発起してください。根回しは植木に任せてください。私には、ジャーナリストや作家の知り合いもいます。必ず、会長を国会議員にして見せます。とにかく、当たって砕けろ、です」

松山は、植木がここまで能天気だとは思わなかった。まったく、政界とはつながりのない田舎ジジイでは、立候補もできないと思ったが、植木の心意気に感謝し、適当に賛同することにした。「そうか、俺のことを、そこまで思ってくれているとは、ありがたい。政界のことは、植木に任せるとして、ここ最近、千秋とラウンドしてないな～～。やっど、ドライバーは、曲がらなくなったが、アイアンはさっぱり進歩しとらん。いっちょ、ラウンドするか」

植木は、会長の政界進出には、千秋社長の後押しが必要と考えていた。現政権の不甲斐なさに辟易している社長ならば、きっと、会長の政界進出に賛同するに違いないように思えた。また、社長の先輩たちには、大物の政財界人がいる。社長にも一肌脱いでいただければ、国会議員実現は可能と思えた。「千秋社長は、忙しくていらっしゃるのですよ。たまには、一息入れるのもいいですね。タイのゴルフツアーは、会長からお話しされた方がよろしいかと。ラウンドしながら、政界進出の件をお話しなされてはいかがでしょう。きっと、社長は、賛成されると思いますよ」松山は、千秋に左脚の使い方をどのように教えようかと考えていたが、政界と言う言葉が頭に響くと、不吉な予感がよみがえり背筋が冷たくなった。

## クラブミニスカ

植木の頭の中には、コンパニオンのオーラルサービスの妄想がますます膨れ上がり、股間は抑えきれないほど盛り上がっていた。このままでは、勢力旺盛な植木は眠れそうもなかった。「会長、今夜あたり、中洲っていうのはいかがでしょう。結構有名なAV女優が東京からやってきているそうです。もう、予約でいっぱいだと思いますが、確かめてみましょうか？」松山も大原の美白巨乳と真っ赤なショーツが脳裏に焼き付いて興奮が収まらなかった。「スケベジジイには、目の毒だ。ロシア美人の股間を見せつけられたんじゃ、鼻血が出るところだった。それにしても、透き通る肌とは、あ~いうのを言うんだな。死ぬまでに一度でいいから、ロシア美人とやってみたいよな」

「予約には、ちょっと遅いとは思いますが、例の店、確認してみましようか？」植木は、右手の小指を立てて、ニコツと笑顔を作った。松山は、金曜日で予約がいっぱいだとは思ったが、行きつけの店を当たらせることにした。「そうだよな。久々にカチンカチンだ。ちょっと、例の店、確認してくれ」植木は、ポンと手を叩き、スマホで即座に行きつけの店を確認した。行きつけの店は、予約でいっぱいだったため、中洲一番の超高級店に電話した。「会長、やはり、例の店は予約でいっぱいでした。バカ高い店は、予約できますが、いかがいたしますか？」

松山は、中洲で有名な最も高い店と聞かされ、ちょっとためらってしまった。松山が考え込んでいると、植木はF大学の後輩で、マージャン仲間のジャーナリストから聞いたクラブを思い出した。「会長、クラブはどうでしょう。知り合いから聞いたのですが、そこのママは、アムロに似た美人だそうです。知り合いに連絡を取ってみましようか？」この興奮は、おさまりそうになかったが、植木の知り合いのジャーナリストに会ってみたくなかった。「まあ、ソープは、いつでも行けるしな。その知り合いと飲むっていうのもいいんじゃないか。連絡とってくれ」

植木は、早速、ジャーナリストの岡崎に電話した。「会長、運良く、今朝東京から戻ったところで、今夜7時以降は、時間が取れるそうです。いかがいたしますか？」松山は、即座にうなずいた。植木は午後8時にクラブで落ち合う約束を取った。「会長、今夜、8時の約束を取りました。そ

れと、ゴルフ仲間の医者を紹介したいと言ってました。私は、仕事を終えて、別荘に6時に参ります」植木がそそくさと立ち去ると松山は座禅を組み瞑想にふけた。

午後六時半に二人は、伊都タクシーで西中洲の“クラブミニスカ”に向かった。親不孝ビルのエレベーターに飛び乗ると5階をプッシュした。エレベーターを降りると左手に“クラブミニスカ”のドアがあった。植木がドアを開けるとアフロヘアの背の高いボーイが声をかけた。「会員様でいらっしゃいますか？」植木が会員の岡崎と待ち合わせていると伝えると二人は右側奥のテーブルに案内された。二人がソファに腰かけると即座に二人の超ミニスカのJKのような初々しいホステスが飛び込んできた。

子猫のようにすり寄り植木の手を取った小柄なホステスが話しかけた。「岡ちゃんのお友達ね。もう来ると思うわ。あちらの方は、すごく渋いわね。社長さん？」植木は、子供のような顔つきのホステスに面食らったが、JKに手を握られたようで、股間が盛り上がってしまった。「こちらは、伊都タクシーの会長です。私は、会長の秘書のようなものです。よろしく」松山の横に腰かけたスリムなホステスが、大げさなお世辞を言った。「会長さん、ステキ。渋い男性に弱い。ああ～～、濡れちゃう」

植木は、もっと洗練されたホステスのいるクラブと思っていたが、JKのようなホステスにどのように話しかけていいか戸惑ってしまった。松山も場違いな場所にやってきたというような顔をしていると、カウンターから真っ赤なロングドレスの女性が笑顔でやってきた。彼女がテーブルに近づくと小柄なホステスが甲高い声で彼女を紹介した。「こちらが、中洲ナンバーワンの美人ママ」ママは、軽くお辞儀すると二人の正面に腰かけ、挨拶した。「ママのナミエです。岡崎様から、お二人のことはうかがっております。もうしばらくお持ちください」ママは、二人のホステスに目配せするとカウンターに戻って行った。

松山は、クラブにしてはホステスが若すぎるのではないかと横の能天気な顔をじろっと見つめた。その視線に気づいた彼女は目を丸くして甲高い声を発した。「そんなに見つめちゃ、感じちゃう。はい、どうぞ」ウイスキーの水割りを差し出した。おじさんがJKをナンパしているようでちょっと気恥ずかしくなった松山だったが、無理に笑顔を作り返事した。「ありがとう。ウイスキーもいいが、ブランデーにしてくれ」クレームと受け取ったホステスは、顔を引きつらせ、即座に謝った。「申し訳ありません。すぐにブランデーをお持ちいたします」頭をぺこぺここと下げ、カウンターに向かっていった。

松山は、ほぼ毎日、ストレートのブランデーをゆっくりとすこしずつ飲む。カウンターから戻ってきたスリムなホステスは、グラスにブランデーを注ぎ、氷を入れようとした。松山は、即座に声をかけた。「いや、氷はいい」ホステスは、おどおどしてグラスを手渡した。グラスを受け取った松山は、香りを嗅ぐとゆっくりと口に含んだ。植木は、腕時計を見ては、しかめっ面をしていた。すでに、8時10分を過ぎていた。植木が、待ち合わせ時間を勘違いしたのではないかと考えていると腕の長いヒョロツとしたイケメン男性とともに岡崎がやってきた。

「いやー、待たせたね。ゴメン、ゴメン」二人の正面に岡崎とイケメン男性が腰かけると岡崎は、イケメン男性を紹介した。「こちらは、中洲総合病院の吉岡先生」松山と植木が視線を向けると背筋を伸ばし両手を膝の上にそろえ吉岡は挨拶した。「吉岡と申します。岡崎君とは、小学校からの親友です。よろしく申し上げます」生真面目な吉岡を気遣って、岡崎は場を盛り上げようと博多弁で話し始めた。「吉岡は医者の子で、秀才たい。中学は、鹿児島の名門R中学に行くことになったバツテン、こいつは、義理と人情に厚い奴たい。親に反対して、俺と一緒に中学にいったばい。でも、さすが吉岡、地元T高校からK 大学医学部たい。こいつは、たいしたもんばい。それに、イケメンやし。めっちゃ、モテルけん。うらやましか～～」

植木は、吉岡を見つめうなずいた。「お医者さんでいらっしゃるんですね。毎日、気苦労が絶えないでしょうね。こちらは、伊都タクシーの松山会長です。私は、専務の植木です。よろしく申し上げます」医者と聞いた植木は、吉岡から議員の話が聞き出せるのではないかと思い、酔いが回ったころ、徐々に聞き出すことにした。「岡崎さんは、今朝東京から戻られたそうで。やはり、お仕事で」岡崎は、頭をかきながら返事した。「まあ、仕事と言えば、かつこいいのですが、同じジャーナリスト仲間から極秘情報とやらを入手しに、まあ、そんなところですよ」

植木が政治の話をするのではないかと懸念した松山は、話に割り込んだ。「固い話は、つまらん。吉岡さんもゴルフをなされるそうで」突然笑顔を作った岡崎が、吉岡の返事を待たず話し始めた。「やりますとも。吉岡は、なかなかのモンです。83, 4で回ります。私は、バクチゴルフですから、やっと、90切るぐらいです。松山様は、日本オープンに出られたトップアマでいらっしゃるのか。いつも、植木さんが、自慢されています」松山は、自分を売り込んだみたいで気まずくなったが、ゴルフの話で場を盛り上げることにした。

「まあ、ゴルフしか、能がないもので。健康のために、週に一回は、ラウンドしています。ぜひとも、御一緒にラウンドさせていただきたいものです」褒められた松山は、謙遜して返事した。高校からゴルフをやっている吉岡は、頭をかきながら返事した。「ゴルフ歴は長いんですが、一向に上達しません。ぜひ、ご教授をお願いします」植木は、ゴルフの話が出たついでに皇帝KGBゴルフ倶楽部会員について聞くことにした。「国際経済のことは、ちょっと疎いのでお聞きしたいのですが。岡崎さん、皇帝KGBゴルフ倶楽部と言うのをご存知ですか？私どもは、そこの会員権を購入いたしました。将来性はありますか？」

岡崎は、今、世界各国に攻勢をかけているロシア皇帝KGBカンパニーについての情報を集めていた。皇帝KGBゴルフ倶楽部会員権を日本でも多くの政財界人が購入しているということで、今後、日本のゴルフ産業が危機に陥ってしまうのではないかと懸念されていた。「そうですか。お宅様も会員に。皇帝KGBゴルフ倶楽部は、ロシア皇帝KGBカンパニーの傘下にあるレジャー企業の一つでして、その株価は急上昇しています。まだ、日本には進出していませんが、いずれ、日本法人皇帝KGBゴルフ倶楽部ができると思われます。そうなれば、競合に負けた日本のゴルフ企業は、ロシア皇帝KGBカンパニーの傘下に入ってしまうのではないかと危惧されています」

植木は、小さくうなずきながら、次の質問を考えていた。「そうですか。ロシア皇帝KGBカンパニーとは、有望株の多国籍企業と言うことですね。と言うことは、その傘下にある皇帝KGBゴルフ倶楽部の会員権価額は、上昇するとみていいですね」腕組みをした岡崎は、マジな顔つきになり返事した。「確かに、相場は上昇すると思います。そのことを見込んで世界中の資産家が、投資しています。余談ですが、ロシア皇帝KGBカンパニーは、アメリカの軍事企業や石油会社の株も買い占めています。そう、さらに、カジノ経営、風俗産業にも手を広げているようです。我々ジャーナリストの間では、ロシアモンスターと呼んでいます」

植木は、じっと耳を澄まして話に聞き入っていた。鋭い目つきから、突然、ニコツと笑顔を作ると質問した。「ところで、岡崎さんは、タイの皇帝KGBゴルフ倶楽部のコンパニオンについてお聞きになったことがありますか？」岡崎もニコツと笑顔を作り返事した。「聞いたことがあります。キャディーのほかにエロエロサービスのコンパニオンがつくらしいですね。なんとも贅沢な話です。私も、そういうところでプレーしたいものです。植木さんたちがうらやましいです。そう、吉岡も勧誘されたそうです。断ったそうですが」



植木は、断つたと聞いて、理由を知りたくなつた。何か、隠された問題点があるのではないかと一瞬思った。「吉岡さんも、あの巨乳ロシア美人に勧誘されましたか？」吉岡は、照れくさそうに話し始めた。「はい、ロシア美人に勧誘されました。でも、医者には、タイでゴルフをするような時間がありません。芥屋でのゴルフも、やっと時間を作っているぐらいなんです。でも、知り合いの現役を退いた医者や代議士たちの中には、タイツアーに出かけているようです。うらやましい限りです」

特に問題点がないと推測できた植木は、ホツとした。ぶしつけな質問で失礼にあたると思ったが、質問することにした。「やはり、議員さんたちも会員に。ところで、吉岡さんには、懇意にされている議員さんがいらっしゃるのですか？」吉岡は、福岡県医師会が支援している議員と親しかった。そのほかに岡崎から紹介された議員とも親しかった。「まあ、数人の議員さんと懇意にしています。議員さんなら、岡崎の方が多いですよ」

岡崎の父親は、不動産会社の専務をしていた。その関係で政治家とのつながりを持っていた。話を振られた岡崎は、目を丸くして返事した。「いや、ま〜、ジャーナリストと言うのは、因果な商売です。ちよくちよく、先生方とゴルフをご一緒させてもらっています。オヤジが、不動産関係の仕事をやっているもので、ご機嫌を取りに、接待してるわけです」植木には、松山の政界進出を考えた場合、ジャーナリストの岡崎と医者の吉岡は、大いに役立つと思えた。

植木は、感心したような顔つきでうなずいた。今後お世話になると考えた植木は、岡崎と吉岡をヨイショすることにした。ニコツと笑顔を作り、吉岡に話しかけた。「我々、趣味がゴルフと言うことで、意気投合ですね。ぜひ、お二人とプレーしたいものです。吉岡さんは、先ほど芥屋とおっしゃっていましたが、芥屋ゴルフ倶楽部には、よくいかれるのですか？」吉岡は、即座に答えた。「はい、芥屋ゴルフ倶楽部の会員です。岡崎と一緒に時々ラウンドしています。ぜひ、4人でラウンドいたしましょう。その折は、松山さん、ご教授お願いします」

岡崎は、松山のゴルフに対する考え方を参考にしたく、吉岡のせこいゴルフをからかうことにした。「聞いてください、こいつのゴルフは、石橋を叩くというか、刻みのよっちゃん、と呼ばれているんです。なんせ、ロングのセカンドで、グリーンまで約250ヤードもあるのに、7番ウッドでフェアウエーに必ず打つんです。肝っ玉が小さいというか、まったく、チャレンジ精神と言うものがないんですよ。松山さん、何とか言ってあげてください」松山は、クスクスと小さな笑いを漏らし、笑顔を作った。「いや、ま〜、誰しもコース攻略があります。吉岡さんには、それなりの計算があって、クラブを選択されているんじゃないですか。でも、冒険も、スリルがあって、いいんですよ」

人前でバカにされ、かなりムカついた吉岡は、岡崎を睨み付けた。吉岡は、神経質でミスするとかなり落ち込むタイプであるため、バクチのようなショットを嫌っていた。松山にコース攻略と理解してもらい、少し機嫌がよくなった。「さすが、会長は、トップアマでいらっしゃる。自分の技術の未熟さを理解してのクラブ選択なのです。こいつは、ディボットでも、スプーンで打つんですよ。正気の沙汰じゃありませんよ」松山は、二人の会話に吹き出しそうになった。仲がいいのか悪いのか、ここまで言い合えるのは、親友だからだと思った。

「まあ、そう、お互いの欠点を指摘しても、スコアはよくなりませんよ。吉岡さんのようにミスを減らすことも大切だし、岡崎さんのようにツーオン狙いで、チャレンジするのも大切です。とにかく、ゴルフは、コースを彼女と思って、あの手この手で攻略しながら、楽しくやればいいんじゃないですか。植木も、ショートウッドを使って、ようやく、90が切れるようになり、ゴルフが面白くなってきたみたいですよ」松山はシングルだから、技術的なことを指摘するとてっきり岡崎は思っていた。ところが、まったく意に反して、コース攻略の観点から上手に教授したことに感銘してしまった。

「さすが、トップアマの松山さん。凡人とは、わけが違う。ゴルフ哲学をお持ちなんですね。我々なんか、ゴルファーのうちに入ってませんな」岡崎が、マジな顔つきで返事すると、隣のピンクヘアのホステスが岡崎をイジルかのように松山に話しかけた。「会長さん、真面目そうな顔をしているけど、オカちゃんって、エロエロなんだから。チョ〜さわり魔。ネ〜、オカちゃん」岡崎は、突然エロの実態を暴かれ顔を真っ赤にした。「おい、まあ〜、エロには間違いはないが、触られて喜んでくせに」ピンクヘアのホステスは「モ〜」とよがり声をあげて、唇を突き出し岡崎の頬にキスをした。



岡崎は、少し前かがみになり、左手の小指を立てて松山に話しかけた。「松山さん、こっちの方だったら、ママにお願いすれば、何とでもなりますけん。ママは、中洲では、ちょっとした顔なんです。AV監督とも懇意にしとりますけん」あきれた吉岡は、即座に岡崎の性癖をぶちまけた。「会長、岡崎の言うことを真に受けてはいけません。なんせ、飲み、打つ、買う、三拍子そろった遊び人なんです。しかも、いまだ独身です。どうしようもない奴です」本性をぶちまけられた岡崎は、「そこまで言うか」とつぶやき、目を丸くし、口をとがらせた。

ピンクヘアのホステスが岡崎の頭をポンと叩いた。「まったく、エロイんだから。ママに言いつけるわよ。最近、御無沙汰だったけど、浮気してたんじゃないの。も～～、くやし～～」ピンクヘアのホステスは、岡崎の股間をギュッと握りしめ催促した。岡崎は、目を丸くするとニコッと笑って、ホステスの股間の奥に手を突っ込み、しばらく、指を動かしていた。ピンクヘアのホステスは、岡崎にぞっこん見たいで、抱き着くと目を閉じてよがり始めた。

松山は、AVと聞いて、目を輝かせた。白々しい演技をするピンクヘアのホステスを見ていると、なんとなく、撮影現場で演技しているAV嬢に思えてきた。目を凝らして店内を見渡すと顔の判別がつかないほど、入った当初よりさらに薄暗くなっているように感じられた。頭を傾けて体を預けているスリムなホステスに声をかけた。「ちょっと、照明を落としてみたいだね。君の顔もよく見えないよ」彼女は、唇を松山の耳たぶにこすりつけてささやいた。「これは、おさわりタイムの合図なの」

店内はかなり薄暗くてホステスの姿がよく見えなかったが、改めて目を凝らして店内を見渡すと席を立て歩いているホステスは、みんな超ミニスカであることに気づいた。腰かけたホステスのスカートは、テーブルで隠れて見えなかったが、左隣のテーブルのホステスたちは、お客に抱きついてか細いよがり声を響かせていた。その時、スリムなホステスがふいに耳打ちした。「女性のことだったら、私に言って、ママにお願いしてあげるから。それと、今がチャンス」と言って松山の左手を握り占めると股間の奥に押し込んだ。

## 付き合いゴルフ

伊達は、ゴルフをやったことがない沢富を強引に引き連れて西区にあるアコーディアゴルフ練習場に来ていた。先日、伊達はF大学からの親友、岡崎にゴルフを誘われていた。岡崎は親友だから、断ったからと言って不仲になるようなことはなかったが、断れない理由があった。と言うのは、伊達の細君、ナオコの父親と岡崎の父親は、不動産売買で裏取引をやっていた。ナオコの父親からプレゼントしてもらったマンションは、岡崎の父親の計らいで、帳簿価額以下で購入したものだ。そのこともあり、ナオコの父親の顔を立てるためにも、岡崎の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

カウンターで1Fの30番と31番を取った伊達は、嫌がる沢富の背中を押しながら練習場内に入って行った。伊達は、キャディーバッグを30番に置くと沢富にピッチングを手渡した。「おい、そ〜、イヤな顔をするな。食わず嫌いは、よくないぞ。とにかく、やってみろ。やっているうちに、面白くなるのが、ゴルフってもんだ。俺だって、恥をかきながら、やってるんだ。とにかく、打ってみろ」沢富は、左手に手袋をするとピッチングを右手に取り座席に立った。一度、目の前のミニスカ少女の張りのあるお尻をチラッと見て、大きなテークバックから思いっきり振り下ろした。ビューと音はしたが、ボールはそのままだった。も一度振るとヘッドの先にあたり、右方向にコロコロと転がった。

沢富の目の前では、ミニスカ少女が大きなお尻を突き出し、ゆっくりとテークバックしながら肩を目いっぱいひねっていた。ダウンスイングに入り一気に振り下ろすとバシッと音をたてたボールは、まっすぐ200ヤードほど飛んで行った。愕然とした沢富は、ミニスカ少女にバカにされるように即座に打つのをやめた。「先輩、当たりませんよ。もう、いいです。先輩、練習してください」伊達は、クスクスと笑いながら、返事した。「最初から、当たりっこないさ。俺なんか、何度、空振りしたことか。まあ、俺の打つのを見てろ」伊達は、ドライバーを手にとると、大きなスタンスで、テークバックした。一気にダウンスイングに入ると「カ〜ン」と快音を響かせたボールは、大きくカーブを描いて右方向に飛んで行った。当たりはよかったが、強烈なスライスだった。

「またか」とつぶやき、伊達は、がっかりした表情を作り、沢富に話かけた。「まあ、ゴルフとは、こんなもんだ」沢富は、あんなに曲がっては、ラウンドしてもゴルフにならないのではないかと同情心が起きた。「先輩、ゴルフってものは、誰が考えたんでしょうね。こんなに小さなボールを小さなヘッドでまっすぐ打つなんて、そもそも、凡人には、出来っこありませんよ。プロは、モンスターですよ。野球もろくにできない僕なんかがやるスポーツじゃありません。先輩も諦めたらどうです？」伊達は、ドスンと椅子に腰を落としがっかりした表情を見せた。「まったく、どうして、まっすぐ飛ばね～んだ。くそ～～。そういっても、付き合いってもんがあるし。断るわけには、いかないんだよな～～」

ゴルフをやりたくないという本心を知った沢富は、伊達が気の毒になってしまった。「先輩、プロだって、最初は当たらなかったはずですよ。とにかくやってみれば、当たるようになるかもしれません。よし、かつ飛ばしてやる」沢富は、ミニスカ少女がキャディーバッグを担いで帰りかけたのをチラッと見て、ホッとした表情でもう一度座席に立った。何度か、ピッチングを振ったが、やはりまともにあたらなかった。「やっぱ、ダメです。僕には、スポーツの才能がないんです」

伊達は、じっと沢富のスイングを見ていた。「まあ、そう嘆くな。パターは、誰だってできる。とにかく、グリーンまでボールを転がせば、なんとかなる。おい、9番ウッドで打ってみろ。これなら、きっと当たる。まず、見本を見せるから、よ〜〜く、見てろ」伊達は、9番ウッドを手に取り、座席に立った。少し短く持ち、コックをせずに、ヒョイと持ち上げハーフスイングした。ピシッと音がすると100ヤードほどまっすぐ飛んだ。目を丸くした沢富は、「ウォー」と言って拍手した。

「先輩、まっすぐ飛んだじゃないですか。僕もやってみます」沢富は、9番ウッドを手渡されると伊達をまねしてハーフスイングした。ピシッと音がすると100ヤード以上飛んだ。「オ〜〜。見ました？先輩。まっすぐ飛びましたよ。僕って、天才かも？」伊達は、ゴルフでよくある能天気な発言に苦笑いした。「まあ、その調子だ。とにかく、前に進めばいいんだ。サワが、一緒に来てくれば、気が楽だ」

気をよくして腰かけた沢富は、スライスが治らず、気落ちして座席でうなだれている伊達に話しかけた。「先輩、ロシア皇帝KGBカンパニーのうわさ、聞いてますか？なんでも、中洲にカジノを作るらしいです。東京かと思っていたのに、よりによって、中洲とは。しかも、風俗産業にも手を広げるらしいです。中洲のソープ嬢は、どうなるんですかね」伊達は、ついに日本も攻撃の対象になってしまったと暗い顔になった。「もう、日本は、おしまいだ。ほとんどの基幹企業は、欧米の多国籍企業に買収され、日本の従業員は奴隷扱いだ。俺たち警察官も、いつリストラされるか分かったものじゃない。イヤダ、イヤダ」

沢富も日本政府の崩壊を直感していた。「先輩、それと、ここだけの話ですが、絶対に極秘ですよ。近々、大掛かりな警察組織の再編成が行われるそうです。国防機動隊と言う軍の組織のようなものができて、そこにかなりの警察官が配置換えされるそうです。さらに、女性警察官を大量に採用するみたいです。どういうつもりですかね。どうも、CIAの構想らしいですよ」肩を落とした伊達は、悲壮な顔でつぶやいた。「ついに警察官まで兵隊にされるのか。軍国主義日本だな」

沢富は、日本の文化を守るためにも護憲運動をすべきだと考えていた。「先輩、今こそ、警察官が護憲運動をすべき時なのです。平和憲法を守りましょう。軍国主義を許してはいけません。クビになるのを恐れているのは、奴隷と同じです。闘いましょう、真の独立を目指して、闘いましょう。日本丸を沈没させてはダメです。日本丸を救う救世主がきっと現れます。諦めては、いきません」伊達は、目じりを下げていたが、ふと、岡崎の言っていたことを思い出した。「岡崎が言っていたぞ、日本のことを真剣に考えているハゲのトップアマが糸島にいるって。そうさ、救世主は、きっと現れる。よっしゃ～～、クビが怖くて、日本が救えるか！」と気合を入れた伊達は、目を輝かせ座席に立った。

使ったことがない筋肉を強引に使ったため、脚腰に痛みが走り始めていた。沢富は、悲鳴を上げた。「あ～～、痛い。もう、いいです」伊達も上達しない自分に嫌気がさしていた。伊達は絶望感が漂う声で話しかけた。「もう、この辺にしとこう。俺も、疲れた。クラブは、俺のクラブを貸すから、頼むな。ティーショットに4番ウッド、セカンドは9番ウッド、寄せにウェッジ52、それとパターがあれば、ラウンドできる」沢富は、恥をかくために行くようなものだから行きたくはなかったが、伊達が気の毒に思えてついて行くことにした。眼下に広がる西区の住宅街を眺めながら待っていたブルーのハスラーは、能天気な二人を乗せると、ブルルンル～～ンと笑い声をあげて、バイパス202を東に向かって走って行った。